

講義「青年心理学」における映像教材の評価

落合 信 寿¹

1. はじめに

心理学関連科目の講義においては、映像教材の利用に対するニーズが高く、様々な講義科目で映像教材の活用がなされている^{1,2)}。心理学関連の講義において使用される映像教材は多種多様であり、専門性の高い教育用教材はもとより、映画、ドラマのような教育用教材とは異なる映像を、心理学関連の授業で活用している事例も報告されている^{3,4)}。

これらの映像教材を講義で効果的に活用するためには、講義内容との関連を明確にし、使用する映像の選択やその使用方法等について、事前に十分な吟味を行ったうえで利用する必要がある。そして、講義で使用した映像教材の効果については、レポート等の評価に基づく教員の主観的かつ定性的な判断のみに依存するのではなく、より客観性の高い受講生による映像教材の定量的評価を実施し、その結果を次年度以降の授業改善に反映させていくことが重要になるであろう。

本研究では、既報⁵⁾で報告した白鷗大学教育学部児童教育専攻の2014年度講義科目「青年心理学」で用いた7本の映像教材について、質問紙調査法によって当該科目の受講生の評価を実施した。本報では、受講生による評価の全般的傾向、調査を通じて明らかになった映像教材の評価、問題点とその改善について報告する。

¹産業医科大学医学部

¹e-mail : ochiain@med.uoeh-u.ac.jp

2. 方法

調査日時および対象者

白鷗大学教育学部児童教育専攻2014年度後期開講科目「青年心理学」の受講生を対象とした。当該科目は、金曜日4限開講の小学校教育コース（以下、小学校コース）、金曜日5限開講の幼児教育・保育コース（以下、幼保コース）の2クラスに分かれており、調査は、講義の最終回（第15回）にあたる2015年1月16日の4限、5限に実施した。対象者の人数は、2クラスの履修者のうち質問紙への回答に同意を得た受講生110名であり、科目履修者全体の77%にあたる。その内訳は、クラス：小学校コース57名、幼保コース53名、性別：男性18名、女性92名、学年：1年生74名、2年生13名、3年生23名であった。

評価対象

2014年度講義で使用した7本の映像教材を評価対象とした。使用した映像教材の概要、講義内容との関連を表1に示す。これらの映像はいずれもTV放送番組で、ドキュメンタリー4本、ドラマ3本であった。このうち、

表1 評価対象とした映像教材の概要

講義回	使用した映像	種類	時間	放送年	放送局	講義・レポート課題との関連
第3回	軽傷ではない	ドキュメンタリー	25分	2014年	長崎文化放送(テレビ朝日)	青年期の同一性達成における危機の問題を考える題材
第7回	イグアナの娘	ドラマ	79分	1996年	テレビ朝日	青年期の悩みとその克服について考える題材
第10回	ネットいじめに向き合うために	ドラマ	30分	2008年	NHK Eテレ	友人関係におけるCMC (Computer Mediated Communication)の問題を考える題材
第12回	彷徨う少女たち ～君は、ひとりじゃない～	ドキュメンタリー	25分	2012年	テレビ朝日	虐待を受けた青年の自立の問題を考える題材
	行き場のない若者たちをどう支えるか ～自立援助ホームの試み～	ドキュメンタリー	29分	2010年	NHK Eテレ	
第13回	14歳 もう一度教室へ	ドキュメンタリー	29分	2012年	NHK Eテレ	不登校の問題を考える題材
第14回	中学生日記 決意(前編)	ドラマ	26分	2007年	NHK Eテレ	いじめの傍観者の問題を考える題材

ドラマ「イグアナの娘」は全11話の1時間番組であるため、主人公とその友人とが関わりあう場面を中心に79分に編集した映像を教材として使用した⁵⁾。それ以外の映像教材は、放送された本編の映像をほぼそのまま用いており、視聴時間は25～30分であった。

評価方法

質問紙調査法を用いた。質問紙では自由記述を含む6種の設問を構成した。各設問は以下の通りである。

- (1) 講義で視聴した各映像教材の個別評価。評価項目は、共感性（映像内容や登場人物に共感した）、知識の獲得（新たな知識を獲得できた）、課題との関連（課題を考察するのに役立った）、青年心理への理解（青年心理への理解が深まった）、および総合評価の5項目で、5段階両極尺度を用いて評価した。これら評価尺度の例を図1に示す。
- (2) ドラマ「イグアナの娘」編集版の視聴時間に関する評価。「とても長い」、「やや長い」、「適切である」、「やや短い」、「とても短い」の5段階両極尺度を用いて評価を行った。
- (3) ドラマ「イグアナの娘」編集版の内容・あらすじの理解度に関する評価。「十分理解できた」、「だいたい理解できた」、「どちらでもない」、「あまり理解できなかった」、「全く理解できなかった」の5段階両極尺度を用いて評価を行った。
- (4) 各映像教材に対する順位法による相対評価。7つの映像教材について、

「映像教材名」	視聴していない				
映像内容や登場人物に共感した	とてもそうだ	ややそうだ	どちらでもない	あまりそうでない	全くそうでない
新たな知識を獲得できた	とてもそうだ	ややそうだ	どちらでもない	あまりそうでない	全くそうでない
課題を考察するのに役立った	とてもそうだ	ややそうだ	どちらでもない	あまりそうでない	全くそうでない
青年心理への理解が深まった	とてもそうだ	ややそうだ	どちらでもない	あまりそうでない	全くそうでない
総合評価	とてもよかった	ややよかった	どちらでもない	あまりよくない	全くよくない

図1 映像教材の個別評価尺度

視聴していない映像を除いて、強く印象に残っている映像の順に順位づけを行った。

- (5) 映像の視聴時間に関する評価。講義で視聴する映像の長さ(視聴時間)はどれくらいが適切だと思うかについて、分単位で記入を求めた。
- (6) 特に印象に残った映像(複数選択可)についての感想を自由記述形式で述べてもらった。

なお、本報では、上記(1)~(5)の結果について報告する。

3. 結果

映像教材の個別評価項目の分析

各映像教材の評価項目5項目に対して1~5の得点を与えて評価得点の平均値、標準偏差を算出した。結果を表2に示す。各評価項目について、映像教材、クラス、性別、学年を要因とした7×2×2×3の4要因分散分析を行った結果、全評価項目において映像教材の主効果は有意でなかった。映像教材と他の要因との交互作用は、総合評価で映像教材×クラス(F(6,396)=3.17, p<.01)、映像教材×性別(F(6,396)=3.80, p<.01)の交互作用が有意であった。

単純主効果検定の結果、映像教材×クラスの交互作用については、小学校コースにおける「イグアナの娘」の総合評価が幼保コースよりも有意に

表2 映像教材の個別評価の平均値と標準偏差

映像教材	共感性		知識の獲得		課題との関連		青年心理への理解		総合評価	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
軽傷ではない	4.35	0.85	4.33	0.68	4.61	0.57	4.48	0.64	4.57	0.53
イグアナの娘	3.67	1.09	4.13	0.86	4.44	0.74	4.39	0.75	4.27	0.76
ネットいじめに向き合うために	3.87	1.03	4.13	0.81	4.47	0.74	4.31	0.79	4.30	0.75
彷徨う少女たち	3.96	0.88	4.60	0.55	4.68	0.47	4.64	0.51	4.59	0.52
行き場のない若者たちをどう支えるか	3.93	0.95	4.64	0.48	4.69	0.54	4.56	0.55	4.62	0.54
14歳 もう一度教室へ	4.03	0.90	4.39	0.66	4.49	0.60	4.56	0.58	4.54	0.55
中学生日記 決意(前編)	4.12	0.97	4.24	0.90	4.53	0.72	4.49	0.79	4.46	0.78

低かった。映像教材×性別の交互作用については、「ネットいじめに向き合うために」の女子の評価が男子よりも有意に低かった。また、女子においては「イグアナの娘」、「ネットいじめに向き合うために」の評価が、「14歳もう一度教室へ」よりも有意に低かった。

次に、総合評価と個別評価項目との関連について検討するため、総合評価を目的変数、他の4項目を説明変数として重回帰分析を行った。結果を表3に示す。これより、重決定係数 $R^2=0.716$ で重回帰式は有意であり($p<.01$)、総合評価に対する影響度は「青年心理への理解」が最も高かった。

「イグアナの娘」の視聴時間

ドラマ「イグアナの娘」編集版の視聴時間に関する評価結果を図2に示す。回答者数は103名で、そのうちの53%は視聴時間が「適切である」と回答している。一方、「とても短い」、「やや短い」の回答は13%、「とても長い」、「やや長い」の回答は34%であり、視聴時間の評価は受講生によってある程度差がみられた。

「イグアナの娘」の内容・あらすじの理解度

ドラマ「イグアナの娘」編集版の内容・あらすじの理解度に関する評価結果を図3に示す。回答者数は104名で、そのうちの88%は「十分理解でき

表3 重回帰分析の結果

説明変数	標準偏回帰係数
共感性	0.214**
知識の獲得	0.216**
課題との関連	0.183**
青年心理への理解	0.421**
重相関係数	0.846**
重決定係数	0.716**

** $p<.01$

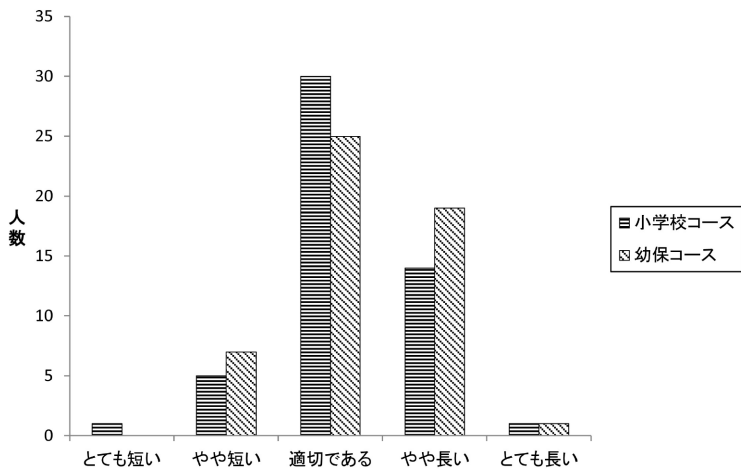


図2 「イグアナの娘」の視聴時間の評価

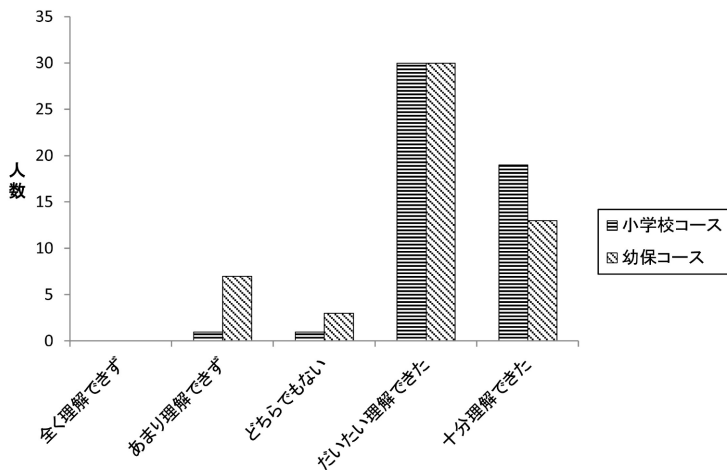


図3 「イグアナの娘」の映像内容・あらすじの理解度

た」もしくは「だいたい理解できた」と回答していた。一方、「どちらでもない」の回答は4%、「あまり理解できなかった」の回答は8%であった。

順位法による映像教材の評価

強く印象に残っている映像教材についての順位づけの結果を表4に示す。表4より、両クラスの結果を併せると、第1位に選択された映像は「イグアナの娘」(n=56)が最も頻度が高く、次いで、「彷徨う少女たち」(n=14)、「軽傷ではない」(n=12)、「中学生日記 決意(前編)」(n=10)の順であった。一方、第7位に選択された頻度が最も高かった映像は「ネットいじめに向き合うために」(n=26)であり、次いで「中学生日記 決意(前編)」(n=17)、「軽傷ではない」(n=13)、「イグアナの娘」(n=12)の順であった。

次に、すべての映像教材に順位づけを行った対象者について、クラスごとに順位づけの一致度を見るため、Kendallの一致係数を算出した。その結果、小学校コース(n=33)の一致係数は $W=0.179(p<.01)$ 、幼保コース(n=48)の一致係数は $W=0.161(p<.01)$ となり、両クラスともに、受講生による順位づけの一致度は極めて低かった。

表4 順位法による映像教材の評価結果

映像教材	コース	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位
軽傷ではない	小学校	1	13	7	10	8	3	5
	幼保	11	12	8	8	2	3	8
イグアナの娘	小学校	33	6	2	1	1	3	5
	幼保	23	7	3	6	3	3	7
ネットいじめに向き合うために	小学校	2	5	9	9	9	11	8
	幼保	2	4	1	7	9	12	18
彷徨う少女たち	小学校	5	7	8	12	9	9	3
	幼保	9	13	12	4	6	8	0
行き場のない若者たちをどう支えるか	小学校	2	12	9	10	10	8	2
	幼保	3	6	11	13	5	11	3
14歳 もう一度教室へ	小学校	7	9	10	8	7	6	3
	幼保	2	6	12	11	12	5	2
中学生日記 決意(前編)	小学校	7	5	12	6	9	7	7
	幼保	3	6	5	4	15	8	10

適切な映像の視聴時間

図4に適切な映像視聴時間のヒストグラムを示す。回答は15～80分の範囲で、平均値は35.96分（SD=15.24）であった。最頻値は30分（n=31）で、次いで20分（n=17）、60分（n=12）、40分（n=11）の順に回答が多かった。

4. 考察

個別評価の結果から、映像教材の評価得点はどの評価項目でも比較的高く、著しく評価の低い映像はなかった。しかし、単純主効果検定の結果から、クラスによって評価に差がある教材や男女で評価が異なる教材の存在が示唆された。

具体的には、「ネットいじめに向き合うために」、「イグアナの娘」の総合評価において、クラス、性別による差がみられた。設問(6)の自由記述の回答やレポートの記述等を精査した結果、「ネットいじめに向き合うために」では、映像の中で使用されているコミュニケーションツールがフィー

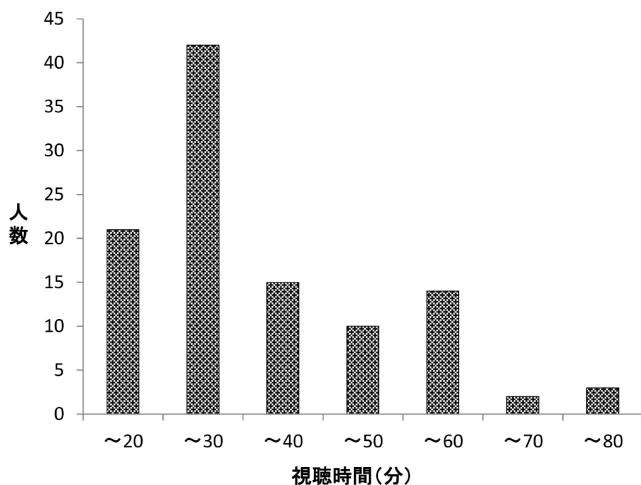


図4 適切な映像視聴時間のヒストグラム

チャー・フォンであり、スマート・フォンが普及した現状では映像内容が古く、実状に沿わない点が多いことが問題として挙げられる。順位法による評価結果でも、この映像は最下位に選択される頻度が最も高かった。これらの理由から、この教材については、より最新の状況に即した別の映像教材を用いた方が望ましいと考えられる。

一方、「イグアナの娘」については、1) 製作時期が1996年であるため、デジタル放送では画質等の影響で映像が古いと感じられやすいこと、2) 映像の視聴時間が適切ではない（長い、もしくは短い）と評価した受講生が一定数いたこと、3) 映像内容・あらすじの理解度が不十分な受講生が8%程度いたことが問題点として挙げられる。

しかしながら、順位法による評価では、「イグアナの娘」は第1位に選択される頻度が最も高かった。個別評価項目の総合評価は絶対評価であるため、教材間での差が明確にならない可能性がある。そのため、順位づけに基づく相対評価により、教材間での評価の相違をより明確にすることを意図して設問を設けている。相対評価に基づけば、「イグアナの娘」は他の映像よりも評価が高い傾向が認められるといえよう。ただし、順位法による評価では「強く印象に残った映像」という設問文を用いたため、高順位に選択した場合でも、それが必ずしも肯定的な評価であるとは限らない点には注意が必要である。

Kendallの一致係数を求めた結果、どちらのクラスも順位づけの一致度は極めて低かった。このことから、映像教材の評価は個人差が大きく、高順位に選択される頻度が高い映像でも、受講生によっては低く評価されることがうかがわれる。

本調査では、「イグアナの娘」の視聴時間、映像内容・あらすじの理解度についても評価を行った。視聴時間については、「長い」と評価する受講生の割合が比較的高かったのが問題であるが、同時に「短い」と感じている受講生もおり、かつ半数以上は「適切である」と回答していることから、この結果のみから安易に視聴時間の変更を検討するのは早計であろう。視

聴時間の「長さ」は受講生の集中力の欠如、飽き等の問題を引き起こし、視聴時間の「短さ」は映像内容・あらすじの理解度の低下をもたらすと考えられる。本調査の結果、映像内容・あらすじの理解度が低い受講生が幾人かいた点については、視聴時間等との関連を踏まえ、十分な改善が必要である。

映像教材の評価項目と総合評価との関連については、総合評価に対して「青年心理への理解」が最も影響度が高かった。このことから、映像の視聴が青年期の心理・行動に対する理解の深化に貢献し、それが高評価に結び付いていることが示唆された。

映像の視聴時間については、30分程度が最も適切と考える受講生が多いことが明らかになった。90分の授業時間の範囲で、教員による講義・説明やリアクションペーパー等への回答との時間配分を鑑みると、30分の映像視聴時間は比較的バランスのとれた配分になると考えられる。

5. 2015年度講義における改善点と評価

本調査の結果ならびにレポート課題の記述内容等を踏まえて、翌年の2015年度後期の講義では、映像教材の使用について、以下の点で改善を試みた。

- (1) 「軽傷ではない」は飲酒運転事故の被害者を取り上げた映像であり、飲酒運転撲滅を意図して製作されている。このため、受講生の中にはレポート課題の意図を十分理解できず、飲酒運転の問題にしか言及しないレポートが若干みられた⁵⁾。この点については、映像の視聴前に上述の点について説明をして、飲酒運転の問題には過度にとらわれないよう教示を行った。
- (2) 「イグアナの娘」については、レポート課題に関する配布資料の説明文をより詳細にした。映像内容・あらすじの理解度が不十分な点については、このドラマの状況設定を理解するうえで重要な主人公の幼少期のストーリーが、編集版には含まれていないことが問題であると考

えた。その対応策として、このドラマの内容・あらすじの理解度を高め、本編の視聴に対する動機づけをより高めることを目的として、主人公の幼少期のストーリーを15分にまとめた映像を別途編集し、本編視聴の前回（第6回講義）後半で課題内容について説明する際に「予告編」として映像の視聴を実施した。

- (3) CMC (Computer Mediated Communication) の問題を考える映像教材として「ネットいじめに向き合うために」の使用を取りやめた。2015年度は、LINEによるコミュニケーションのトラブルという最新の状況に対応するため、2014年6月28日にNHK Eテレで放送した「いじめをノックアウト ネットでトラブル!? どう切り返す?」(10分)、2014年7月7日にTBS系列で放送した「ニュース23 特集LINEいじめ…スマホ禁止の効果は?」(11分)の2つの映像を使用した。

上記(3)の通り、2015年度講義では8本の映像教材を使用した。2016年1月29日に行った2015年度の最終回(第15回)講義において、小レポート課題として「本講義で使用した8点の映像教材のうち、視聴してよかったと思うもの(複数選択可)を取り上げ、その理由を述べてください。」という内容で授業時間内にレポートの提出を求めた。提出された全レポート(小学校コース:157名、幼保コース:62名)について取り上げられていた映像の延べ数を集計し、その結果をまとめたのが表5である。

表5 2015年度講義における映像教材の評価結果

	小学校	幼保	合計	順位
軽傷ではない	45	24	69	3
イグアナの娘	66	42	108	1
彷徨う少女たち	50	20	70	2
行き場のない若者たちをどう支えるか	35	12	47	5
14歳 もう一度教室へ	48	8	56	4
中学生日記 決意(前編)	24	11	35	7
いじめをノックアウト	21	11	32	8
ニュース23 特集LINEいじめ	29	11	40	6

表5より、2015年度講義で最も評価の高かった映像教材は「イグアナの娘」(n=108)であり、次いで「彷徨う少女たち」(n=70)、「軽傷ではない」(n=69)の順であった。この結果は2014年度の順位づけによる評価結果と一致している。新たに使用した2本の映像教材「いじめをノックアウト」、「ニュース23 特集LINEいじめ」については、他の映像と比較すると相対的な順位は低いものの、どちらも延べ人数で30~40名の受講生が高く評価していたことから、改善の効果はある程度認められたと考えられる。

6. おわりに

本講義では、数年前から映像教材の活用に着目し、講義内容に適した映像の発掘やその使用方法について年々検討を重ねてきた。本研究はその一環として実施したものである。講義の教材として使用に値する映像は、視聴者の心に訴えかける何かを秘めており、受講生から高く評価されているものも多い。

しかし、残念なことにこれらの映像は、TV放送で録画の機会を逃すと二度と視聴することができないものがほとんどである。本講義で使用した映像の中では、DVDが市販されている「イグアナの娘」、DVD付書籍⁶⁾に収録されている「中学生日記 決意(前編)」は一般に入手可能であるが、それ以外の映像は、TV放送において再放送の機会がなければ、ほぼ入手不可能である。とりわけ、本講義の中で比較的高い評価を得た「軽傷ではない」、「彷徨う少女たち」という2本のドキュメンタリーは、深夜に放送された番組であることから視聴者の目に触れる機会は少なく、地上波では再放送の機会もない。

著作権の問題等に十分配慮する必要があるが、教材として優れたTV放送番組を収集し、共有化する仕組みを構築することができれば、心理学教育における映像教材の効果的な活用が、より一層促進されることが期待されよう。

注

本研究の一部は、2015年9月22日～24日に開催された日本心理学会第79回大会（名古屋大学）において発表した。

参考文献

- 1) 伊藤秀子・宮本友弘・宮本正一・大野木裕明・中澤潤・魚崎祐子 (2004a). 心理学教育における映像教材の利用とニーズ (I) —利用状況の分析— 日本心理学会第68回大会発表論文集, 1170.
- 2) 伊藤秀子・宮本友弘・大野木裕明・中澤潤・宮本正一・魚崎祐子 (2004b). 心理学教育における映像教材の利用とニーズ(II) —ニーズの分析— 日本教育心理学会第46回総会発表論文集, 506.
- 3) 米谷淳 (2001). 心理学教育への映像教材の活用 研究報告 (放送大学), 26, 311-321.
- 4) 瀬戸美奈子 (2013). 心理学の授業における映画教材の活用 大学教育研究：三重大学授業研究交流誌, 21, 41-45.
- 5) 落合信寿 (2015). 講義「青年心理学」における映像教材の活用—実践報告—. 白鷗大学教育学部論集9, 305-316.
- 6) NHK「中学生日記」製作班 (2008). NHK中学生日記 DVDブック いじめ、なくしたい。毎日コミュニケーションズ